

啄木全集

第二卷

啄木全集

第二卷

筑摩書房

啄木全集 第二卷 詩集

一九六七年八月三〇日 初版第一刷発行
一九七四年六月一〇日 初版第七刷発行

著 者 石 川 啄 木

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式 会社 筑 摩 書 房
電話 東京 (〇三) 七六五一 (代表)
振替 東京 一四 一一二一三
郵便番号 一〇 一一九一

本文用紙 三菱製紙
表紙クロス 東洋クロス
印刷 矢島製本

(分類) 0392 (製品) 70802 (出版社) 4604

目次

あこがれ

啄木 上田 敏

沈める鐘（序詩）

杜に立ちて

白羽の鶴船

啄木鳥

隠沼

人に捧ぐ

楽声

海の怒り

荒磯

夕の海

森の追懷

三 四 五 五 六 六 七 七 八 八 九 九

おもひ出

いのちの舟

孤境

錦木塚

にしき木の巻

のろひ矢の巻

梭の音の巻

鶴飼橋に立ちて

落瓦の賦

山彦

曉鐘

暮鐘

夜の鐘

一〇 三 三 三 三 四 五 六 九 一〇 三 三 二四 二四

あゆみ

江上の曲

枯林

天火蓋

壁画

炎の宮

のぞみ

眠れる都

二つの影

夢の宴

うばらの冠

心の声

電光

祭の夜

曉霧

七五

六

七

七

六

七

七九

 Δ

스

스

八五

六

八九

八九

「あこがれ」補遺

西伯利亞の歌（『岩手日報』）

風絃搖曳

秋風高歌（抄）（以上一篇「時代思潮」）

愛の海（「白百合」）

お蝶

梟（以上二篇「太陽」）

老將軍（「日露戦争写真画報」）

「あこがれ」以後

落人ごころ

落人ごころ(つゞき)(以上二篇「岩手日報」)

無題
(浪とことには新らしく……)

夕暮

燕

恋

公孫樹

雪の夜（以上六篇「小樽日報」）

夏の街の恐怖へ心の姿の研究(一)へ

起きるなへ心の姿の研究(二二)

事ありげな春の夕暮へ心の姿の研究(三)

柳の葉へ心の姿の研究(四)▽

拳△同▽

騎馬の巡査（以上六篇「東京毎日新聞」）

古苑

卯月の夜半

よみがへれ

杜陵雜詩

妹よ

琴を弾け

この心

さみだれ	三五	殺意	二七
みちのくの神無月	三七	辯疏	二七
たはぶれ	三九	散文詩	二九
かりがね	三〇	曠野	二九
深みの心	三〇	白い鳥、血の海	二四
雨にぬれて	三三	火星の芝居	二四
燕	三三	二人連	二四
鹿角の国を憶ふ歌	三三	祖父	二四
幕びらき	三四	流木	二四
花ちる日	三四	黒き箱	二五
落紅集	三五	老人	二五
春月	三五	白骨	二五
友藻外に	三六	わが少女も	二五
泣くよりも	三六	物なやみ	二五
あによめ	三七	おどろき（以上三十四篇「明星」）	二五

桜人

君ゆゑ

目さむれば

卯月の夜半

破歌車（以上四篇「太陽」）

啄木鳥に

夏は来ぬ（以上二篇「白百合」）

仏頭光

仏頭光

落日

東京（以上三篇「小天地」）

野の花（「野の花」）

野の花（「むさしの」）

吹角（「芸苑」）

公孫樹

一五

かりがね

一六

一五

雪の夜

一七

一五

鹿角の国を憶ふ歌

一八

一五

水無月

一九

一五

年老いし彼はあき人

二〇

一五

辻

二一

一五

蟹に

二二

一五

馬車の中（以上九篇「紅苜蓿」）

二三

一五

あくがれ（「サ、ヤキ」）

二四

一五

詩六章

二五

一五

路傍の草花に

二六

一五

口笛

二七

一五

手紙

二八

一五

花かんざし

二九

一五

あゝほんとに

三〇

昨日も今日も（以上六篇「精神修養」）

はてしなき議論の後（「創作」）

詩稿ノート

黄草集

さすらひ心

古苑

卯月の夜半

よみがへれ

秋雨

桜のまぼろし

五城二首

夏は来ぬ

くだかけ

香盞

琴をひけ

妹よ

明滅

江畔雜詩

さみだれ

仏頭光

落日

東京

啄木鳥に

野の花

深みの心

蹄のあと

たはぶれ

かりがね

燕

雨にぬれて

一九二

一九三

一九六

一九九

二〇〇

二〇一

二〇三

二〇四

二〇四

二〇五

二〇六

二〇七

二〇八

二〇八

二〇八

海辺の春の夜	二〇九
鹿角の国を憶ふの歌	二〇九
みちのくの神無月	二一一
丙午三十九年	二二三
幕びらき	二二三
野ばら	二二四
うたた寝	二二四
木犀	二二五
渋民村小陰	二二五
花ちる日	二二五
春月	二二六
友藻外に	二二七
山杜鵑	二二七
吹角	二二八
公孫樹	二二九

雪の夜	二〇九
はてしなき議論の後	二一一
呼子と口笛	二二三
はてしなき議論の後	二二三
ココアのひと匙	二二三
激論	二二四
書齋の午後	二二四
墓碑銘	二二五
古びたる鞆をあけて	二二五
家	二二六
飛行機	二二七
明治四十一年作歌ノートより	二二七
無題（かゝる時、あなあはれ……）	二二七
青き家	二二八
失せにける色赤き花	二二九

無題（人なき森に我一人……）

三三

黒き箱

二四四

黒き鍵

三三

一塊の土

二四四

無題（わが鉢に花さきぬ……）

三三

白骨

二四五

遠き星

三三

山頂

二四六

木の果は色づきぬ

三三

老人

二四七

何処にかゆける

三三

森の中

二四八

無題（音もなく雪ふりつもる……）

三三

冬の夜

二四九

無題（わが歌は、わが歌は……）

三三

わが少女も

二四九

今聞ゆ

三三

渡鳥

二五〇

無題（夏の日の遠き旅路に……）

三三

無題（昼は落葉をのせ……）

二五〇

無題（数しれぬ星はあれども……）

三三

無題（秋の夕べの重くるしさ……）

二五一

八月の物なやみ

三三

若き主人の留守

二五一

その他

騎馬巡查

二五二

函館図書館所蔵の詩稿より

二五

無題（屋根又屋根……）

二五三

流木

二五

無題（いかめしく髯をはやした……）

二五三

拳

無題（おのれより力ある友に……）

無題（西日をうけて熱くなつた……）

夏の街

無題（赤！ 赤！……）

日記より

無題（歌作り……）（「丁未日記」）

無題（Iri-nen bakari no aida……）

ATARASHIKI MIYAKO NO KISO.

（以上二篇「ローマ字日記」）

書簡より

無題（札幌は「昨日以来……」）

唱歌

校友歌

別れ

劇詩 沈黙の声

その他（泣くよりもほか）

窓

何故に

白き顔

泣くよりも

嫂

殺意

辯疏

小さき墓

「あこがれ以後」序詩

参考資料

夏の朝（「あけぼの」）

幽思

恋

遊蝶花

二八三

知人岬

二八四

審判

二八三

微笑

二八五

磯

二八三

光

二八五

支庁坂

二八三

おそれ（以上十一篇「釧路新聞」）

二八五

幣舞橋

二八四

解説
題

小田切秀雄
二九〇

岩城之徳
二九一

あこがれ

此 尾 此
書 崎 書
を 行 を
氏 雄
に 遙
に 併
に 献
に 郷
に 故
に 捧
ぐ 山
河

啄木

上田敏

婆羅門の作れる小田を食む鴉、
 なく音の、耳に慣れたるか、
 おほをそ鳥の名にし負ふ
 いつはり声のだみ声を
 又なき歌とほめそやす
 木兎、梟や、椋鳥の
 ともばやしこそ笑止なれ。
 聞かずや、春の山行に
 林の奥ゆ、伐木の
 丁々として、山更に
 なほも幽なる山彦を。
 こはそも仙家の斧の音か、
 よし足引の山姥が
 めぐりめぐれる山めぐり、
 輪廻の業の音づれか、

いなとよ、ただの鳥なれど、

赤染いろのはねばうし、
 黒斑、白斑のあや模様、
 紅梅、朽葉の色許りて、
 なに思ふらむ、きつつきの
 つくづくわたる歌の枝。

げに虚なる朽木の
 幹にひそめるけら虫は
 風雅の森のそこなひぞ、
 釣けて食ひね、てらつつき。
 また人の世の道なかば
 閑路の林ゆきまよふ
 誠の人を導きて
 飲楽山にしるべせよ。
 噫、あこがれの其歌よ、
 そぞろぎわたり、胸に泌み、
 さもこそ似たれ、陸奥の
 卒都の浜辺の呼子どり
 なくなる声は、善知鳥、
 安瀉。